Informatica® Cloud Data Integration

JDBC コネクタ

Informatica Cloud Data Integration JDBC コネクタ
2022 年 10 月

© 著作権 Informatica LLC 1993, 2022

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複写、写真複写、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica ロゴ、Informatica Cloud、および PowerCenter は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web（https://www.informatica.com/trademarks.html ）にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

特許については、https://www.informatica.com/legal/patents.html を参照してください。

免責: 本文書は、一切の保証を伴わない「現状渡し」で提供されるものとし、Informatica LLC は他社の権利の非侵害、市場性および特定の目的への適合性の黙示の保証などを含めて、一切の明示的および黙示的保証の責任を負いません。Informatica LLC では、本ソフトウェアまたはドキュメントに誤りのないことを保証していません。本ソフトウェアまたはドキュメントに記載されている情報には、技術的に不正確な記述や誤植が含まれる場合があります。本ソフトウェアまたはドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。

NOTICES

この Informatica 製品（以下「ソフトウェア」）には、Progress Software Corporation（以下「DataDirect」）の事業子会社である DataDirect Technologies からの特定のドライバ（以下「DataDirect ドライバ」）が含まれています。DataDirect ドライバには、次の用語および条件が適用されます。

1. DataDirect ドライバは、特定物として現存するままの状態で提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。
2. DataDirect または第三者は、予見の有無を問わず発生した ODBC ドライバの使用に関するいかなる直接的、間接的、偶発的、特別、あるいは結果的損害に対して責任を負わないものとします。本制限事項は、すべての訴訟原因に適用されます。訴訟原因には、契約違反、保証違反、過失、厳格責任、詐称、その他の不法行為を含みますが、これらに限るものではありません。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2022-12-04

目次

序文 4

Informatica のリソース 4

Informatica マニュアル 4

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト 4

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティ 4

Informatica Intelligent Cloud Services マーケットプレース 5

データ統合コネクタのドキュメント 5

Informatica ナレッジベース 5

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center 5

Informatica グローバルカスタマサポート 5

第 1 章 : JDBC コネクタの紹介 6

JDBC コネクタ概要 6

JDBC コネクタアセット 6

JDBC コネクタの管理 7

第 2 章 : JDBC 接続 8

JDBC 接続の概要 8

JDBC 接続プロパティ 8

JDBC 接続のルールおよびガイドライン 9

第 3 章 : 同期 10

同期タスクの JDBC ソース 10

同期タスクにおける JDBC ターゲット操作 11

同期タスクにおける JDBC ターゲットプロパティ 12

同期タスクにおける JDBC ルックアップ 13

同期タスクのトラブルシューティング 13

同期 13

第 4 章 : JDBC を使用したマッピングとマッピングタスク 16

マッピングの JDBC ソース 16

マッピングの JDBC ターゲット 17

マッピングの JDBC ルックアップ 19

付録 A : JDBC データ型のリファレンス 20

JDBC のデータ型とトランスフォーメーションデータ型 20

索引 22

序文

*JDBC コネクタ*を使用して、Cloud データ統合で JDBC タイプ 4 ドライバを用いてデータベースに対して読み取りまたは書き込みを行う方法について説明します。データ統合での接続の作成、マッピングの開発、同期タスク、マッピングタスクやデータ転送タスクの実行について学習します。

Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、https://docs.informatica.com にアクセスしてください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム（infa_documentation@informatica.com）までご連絡ください。

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト（http://www.informatica.com/cloud）にアクセスできます。このサイトには、Informatica Cloud 統合サービスに関する情報が含まれます。

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティ

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティを使用して、技術的な問題について議論し、解決します。また、技術的なヒント、マニュアルの更新情報、FAQ（よくある質問）への答えを得ることもできます。

次の Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティにアクセスします。

https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration

開発者は、次の Cloud 開発者コミュニティで詳細情報を確認したり、ヒントを共有したりできます。

https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration/cloud-developers

Informatica Intelligent Cloud Services マーケットプレース

Informatica マーケットプレイスにアクセスすると、データ統合コネクタ、テンプレート、およびマップレットを試用したり購入したりできます。

https://marketplace.informatica.com/

データ統合コネクタのドキュメント

データ統合コネクタのドキュメントには、マニュアルポータルからアクセスできます。マニュアルポータルを利用するには、https://docs.informatica.com にアクセスしてください。

Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、https://search.informatica.com にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム（KB_Feedback@informatica.com）です。

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center は、Informatica のセキュリティポリシーおよびリアルタイムでのシステムの可用性について情報を提供します。

Trust Center（https://www.informatica.com/trust-center.html）にアクセスします。

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center にサブスクライブして、アップグレード、メンテナンス、およびインシデントの通知を受信します。Informatica Intelligent Cloud Services Status ページには、すべての Informatica Cloud 製品の実稼働ステータスが表示されます。メンテナンスの更新はすべてこのページに送信され、停止中は最新の情報が表示されます。更新と停止の通知がされるようにするには、Informatica Intelligent Cloud Services の 1 つのコンポーネントまたはすべてのコンポーネントについて更新の受信をサブスクライブします。すべてのコンポーネントにサブスクライブするのが、更新を逃さないようにするための最良の方法です。

登録するには、https://status.informatica.com/に移動し、**[更新を購読登録]** をクリックします。その後、電子メール、SMS テキストメッセージ、Webhook、RSS フィードとして、またはこの 4 つを任意に組み合わせて送信された通知を受信することを選択ができます。

Informatica グローバルカスタマサポート

電話またはオンラインでカスタマサポートセンターに連絡できます。

オンラインサポートについては、Informatica Intelligent Cloud Services の **[サポート要求の送信]** をクリックしてください。またオンラインサポートを使用して問題を記録することもできます。オンラインサポートを利用するには、ログインが必要です。https://network.informatica.com/welcome でログイン要求できます。

Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica の Web サイト https://www.informatica.com/services-and-training/support-services/contact-us.html に掲載されています。

第 1 章

JDBC コネクタの紹介

この章では、以下の項目について説明します。

- JDBC コネクタ概要, 6 ページ
- JDBC コネクタアセット, 6 ページ
- JDBC コネクタの管理, 7 ページ

JDBC コネクタ概要

JDBC 接続を使用して、JDBC タイプ 4 ドライバを持つデータベースに接続できます。

JDBC コネクタは、JDBC 仕様 3.0 Java API およびタイプ 4 データベースプロトコルドライバを使用します。JDBC は、複数のプラットフォームに対応しています。同期タスク、マッピング、およびマッピングタスクで JDBC 接続を使用することにより、ソース、ターゲット、およびルックアップに接続できます。テーブル、ビュー、およびシノニムへのアクセスが可能です。

マッピングを詳細モードに切り替えて、高度な機能を有効にするためのトランスフォーメーションと関数を含めることができます。

注: JDBC コネクタは、Informatica が Informatica Cloud データ統合ネイティブコネクタを介したアクセスができないデータベースへの汎用接続を拡張します。JDBC コネクタを使用する場合、Informatica は、Informatica Cloud データ統合ネイティブコネクタを使用した場合に期待されるものと同等の機能またはパフォーマンスを保証しません。接続するデータベースは、JDBC コネクタでの使用についてテストまたは認証されていない可能性があり、接続または実行の問題が発生する可能性があります。

JDBC コネクタアセット

データ統合でアセットを作成し、JDBC コネクタを使用してデータを統合できます。

JDBC コネクタを使用する場合は、次のデータ統合アセットを含めることができます。

- データ転送タスク
- マッピング
- マッピングタスク
- 同期タスク

アセットとトランスフォーメーションの設定に関する詳細については、データ統合のドキュメントの「*マッピング*」、「*トランスフォーメーション*」、および「*タスク*」を参照してください。

JDBC コネクタの管理

タスクで JDBC オブジェクトをソースまたはターゲットとして使用する前に、管理者が JDBC 接続をインストールして設定する必要があります。

ユーザーは、管理者が次のタスクを実行した後に JDBC を使用できます。

- 組織用の JDBC_IC コネクタをインストールします。
- データベースでサポートされているデータベースドライバの最新バージョンを使用します。ランタイム環境にあるすべての Secure Agent マシンの同じディレクトリに、データベースの JDBC ドライバ jar ファイルがインストールされていることを確認します。
- JDBC ドライバ jar ファイルのパスを指すように CLASSPATH システム変数を更新します。JDBC 接続の設定時にディレクトリパスが指定されなかった場合、Secure Agent は、CLASSPATH システム変数に指定されたディレクトリから jar ファイルを取得します。

JDBC 接続へのサーバーレスランタイム環境の使用

JDBC 接続にサーバーレスランタイム環境を使用する場合は、次のタスクを実行します。

1. AWS のサーバーレスエージェント設定用に次の構造を作成します: `<Supplementary file location>/serverless_agent_config`
2. AWS アカウントの次の場所にある Amazon S3 バケットに JDBC ドライバを追加します: `<Supplementary file location>/serverless_agent_config/jdbc`
3. 次のコードスニペットをテキストエディタにコピーします。

   ```
   version: 1
   agent:
     dataIntegrationServer:
       autoApply:
         jdbc:
           drivers:
             - fileCopy:
                 sourcePath: jdbc/<Driver_filename>
   ```

   ここで、ソースパスは AWS の JDBC ドライバのディレクトリパスです。
4. 構文とインデントが有効であることを確認してから、ファイルを `serverlessUserAgentConfig.yml` として次の AWS の場所に保存します: `<Supplementary file location>/serverless_agent_config`
   .yml ファイルが実行されると、JDBC ドライバが AWS の場所からサーバーレスエージェントディレクトリにコピーされます。
5. JDBC 接続プロパティで、**[JDBC Jar ディレクトリ]** フィールドにサーバーレスランタイム環境の次のディレクトリを指定します: `/home/cldagnt/SystemAgent/serverless/configurations/jdbc`

第 2 章

JDBC 接続

この章では、以下の項目について説明します。

- JDBC 接続の概要, 8 ページ
- JDBC 接続プロパティ, 8 ページ
- JDBC 接続のルールおよびガイドライン, 9 ページ

JDBC 接続の概要

JDBC 接続を作成すると、JDBC タイプ 4 ドライバを使用して、データベースのデータにアクセスできます。JDBC 接続を使用することにより、同期タスクでソース、ルックアップ、およびターゲットを指定できます。JDBC 接続を作成するときは、JDBC に固有のプロパティを入力します。

JDBC 接続は、**[接続]** ページ、または同期タスクウィザードで作成できます。作成した接続は、組織全体で使用できるようになります

JDBC 接続プロパティ

JDBC 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、JDBC 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
JDBC 接続 URL	データベースに接続するための JDBC URL 文字列。 JDBC URL の形式は次のとおりです: `jdbc:<サブプロトコル>:<サブネーム>` ここで、サブプロトコルは、1 つ以上のドライバがサポートするデータベース接続メカニズムを定義します。サブネームの内容と構文は、サブプロトコルに応じて異なります。 JDBC URL 接続文字列のフォーマット要件については、JDBC ドライバベンダ固有のドキュメントを参照してください。

接続プロパティ	説明
JDBC Jar ディレクトリ	オプション。JDBC ドライバ jar ファイルへのパス。例えば、次のディレクトリを入力できます: `C:/jdbc`。ディレクトリパスを指定しない場合、Secure Agent は、CLASSPATH システム変数に指定されたディレクトリから jar ファイルを取得します。 JDBC 接続にサーバーレスランタイム環境を使用するには、次の場所を指定します: `/home/cldagnt/SystemAgent/serverless/configurations/jdbc`
JDBC ドライバクラス名	オプション。JDBC ドライバを自動クラス読み込み機能なしで使用している場合、JDBC ドライバのクラス名を指定します。このプロパティを指定しない場合、Secure Agent は JDBC ドライバの jar ファイルからドライバのクラス名を読み込みます。
スキーマ	スキーマ名。データベースによって異なります。以下に例を示します。 - Informix。オプション。スキーマ名はデータベース名です。 JDBC 接続 URL から十分なコンテキストが得られない場合は、スキーマ名を入力してメタデータを取得する必要があります。
ユーザー名	データベースに接続するためのユーザー名。
パスワード	データベースに接続するためのパスワード。

JDBC 接続のルールおよびガイドライン

JDBC 接続では、次のルールとガイドラインを考慮してください。

- デフォルトでは、引用識別子が有効で、データベースごとに異なっている。
- JDBC テーブルのデフォルトの最大カラムサイズは、データベースで設定される。

第 3 章

同期

この章では、以下の項目について説明します。

- 同期タスクの JDBC ソース, 10 ページ
- 同期タスクにおける JDBC ターゲット操作, 11 ページ
- 同期タスクにおける JDBC ターゲットプロパティ, 12 ページ
- 同期タスクにおける JDBC ルックアップ, 13 ページ
- 同期タスクのトラブルシューティング, 13 ページ
- 同期, 13 ページ

同期タスクの JDBC ソース

JDBC ソースを使用するように同期タスクを設定するときは、詳細ソースプロパティを設定できます。パフォーマンスを最適化するには、**［データフィルタ］**ページでフィルタを設定します。

簡易フィルタまたは詳細フィルタを設定し、ソースの行を削除します。データフローの初期段階でフィルタリングを行うことによって効率を上げることができます。

簡易フィルタには、フィールド名、演算子、値が含まれます。詳細フィルタを使用するとより複合フィルタ条件を定義できます。例えば、AND 論理演算子または OR 論理演算子を使用して、複数の条件を組み込むことができます。

［データフィルタ］ページで、［ソート基準］フィールドと［グループ化］フィールドを使用してレコードのソートおよびグループ化を行うことができます。

詳細ソースプロパティは、同期タスクウィザードの**［スケジュール］**ページに表示されます。

次の表に、JDBC の詳細ソースプロパティを示します。

詳細ソースプロパティ	説明
ページサイズ	JDBC ソースからキャッシュされる行数。デフォルトは 1000 です。
分離レベル	トランザクションの並行処理レベルを決定して、データの不整合を回避します。以下の分離レベルから選択します。 - なし - TRANSACTION READ COMMITTED - TRANSACTION READ UNCOMMITTED - TRANSACTION REPEATABLE READ - TRANSACTION SERIALIZABLE デフォルトは［なし］です。
分離レベルのオーバーライド	データベースで分離レベルがサポートされていない場合、その分離レベルをオーバーライドします。このオプションをチェックすると、データベースのデフォルトの分離レベルでタスクが正常に実行されます。
Pre SQL	ソースからデータを読み取る前にソースデータベースに対して実行する Pre SQL コマンドです。
Post SQL	ソースからデータを読み取った後にソースデータベースに対して実行する Post SQL コマンドです。
改ページの有効化	該当なし。
取得される行数	JDBC ソースから読み取られる行数。取得される行数を指定すると、取得されるデータが制限されます。デフォルト値はゼロで、取得される行数に制限はありません。
スキップされる行数	該当なし。

同期タスクにおける JDBC ターゲット操作

JDBC ターゲットに対して、挿入、更新、更新/挿入、および削除の各操作を実行できます。ターゲット操作に基づいてフィールドマッピングを設定します。

プライマリキーフィールドをマップすると、同期アプリケーションは、挿入、更新、挿入/更新、または削除するレコードを識別できます。

JDBC ターゲットに対して挿入、更新、または挿入/更新の各操作を行うタスクを実行するときは、更新するプライマリキーフィールドと他のすべてのフィールドをマップします。

JDBC ターゲットに対して削除操作を行うタスクを実行するときは、プライマリキーフィールドのみをマップします。他のフィールドは、いずれもマップする必要はありません。

ビットデータ型の Postgres JDBC のターゲットフィールドに書き込みを行うと、PostgreSQL および JDBC の制限により、同期タスクが失敗します。

JDBC ターゲットオブジェクトと 10 進数用に指定した精度の値（6,3 など）を使用して同期タスクを作成すると、指定した精度の値を超える精度の 10 進数フィールドがターゲットに含まれる場合、タスクが失敗します。これは Derby の制限により発生します。

同期タスクにおける JDBC ターゲットプロパティ

同期タスクをスケジュールするときに、詳細ターゲットプロパティも設定できます。

JDBC ターゲットを使用するように同期タスクを設定するときは、詳細ターゲットプロパティを設定できます。詳細ターゲットプロパティは、同期タスクウィザードの［**スケジュール**］ページに表示されます。

次の表に、JDBC の詳細ターゲットプロパティを示します。

詳細ターゲットプロパティ	説明
コミット間隔	コミット間の行間隔。デフォルトは 100 です。
再試行回数	整数値。接続が閉じたことによりクエリ実行が失敗した場合の再試行回数。デフォルトは 5 です。
再試行間隔	2 回の再試行の間隔（秒単位）。デフォルトは 3 秒です。
Pre SQL	データをターゲットを書き込む前にターゲットデータベースに対して実行する Pre SQL コマンドです。
Post SQL	データをターゲットを書き込んだ後にターゲットデータベースに対して実行する Post SQL コマンドです。
成功ファイルディレクトリ	成功ファイルのディレクトリ。各 Secure Agent マシンのランタイム環境で使用可能なディレクトリパスを指定します。デフォルトでは、データ統合は成功行ファイルをディレクトリ`<Secure Agent installation directory>/apps/Data_Integration_Server/data/success` に書き込みます。 Secure Agent のローカルディレクトリを入力します。管理者からこのディレクトリに対するアクセス権が与えられていることを確認します。
エラーファイルのディレクトリ	エラー行ファイルのディレクトリ。各 Secure Agent マシンのランタイム環境で使用可能なディレクトリパスを指定します。デフォルトでは、データ統合はエラー行ファイルをディレクトリ`<Secure Agent installation directory>/apps/Data_Integration_Server/data/error` に書き込みます。 Secure Agent のローカルディレクトリを入力します。管理者からこのディレクトリに対するアクセス権が与えられていることを確認します。

同期タスクにおける JDBC ルックアップ

同期タスクでフィールドマッピングを設定するときは、JDBC オブジェクトに対するルックアップを作成できます。

JDBC オブジェクトをルックアップとして使用する場合、特定の JDBC プロパティを設定する必要はありません。

同期タスクのトラブルシューティング

次に示す状況に対する解決方法は、JDBC 同期タスクのトラブルシューティングで役に立つことがあります。

同期タスクが失敗します。

同期タスクを実行して JDBC ターゲットにデータを書き込むとき、次の状況の場合、SQLSyntaxErrorException エラーでタスクが失敗します。

- JDBC ターゲットに、精度が 31 を超える Decimal データ型のフィールドがある。
- コミット間隔が 1 より長い。
- 成功ファイルディレクトリまたはエラーファイルディレクトリを指定した。

コミット間隔が 1 より大きく、成功ファイルディレクトリまたはエラーファイルディレクトリを指定した場合、このエラーを解決するには、精度が 0-31 の Decimal データ型のフィールドを使用します。

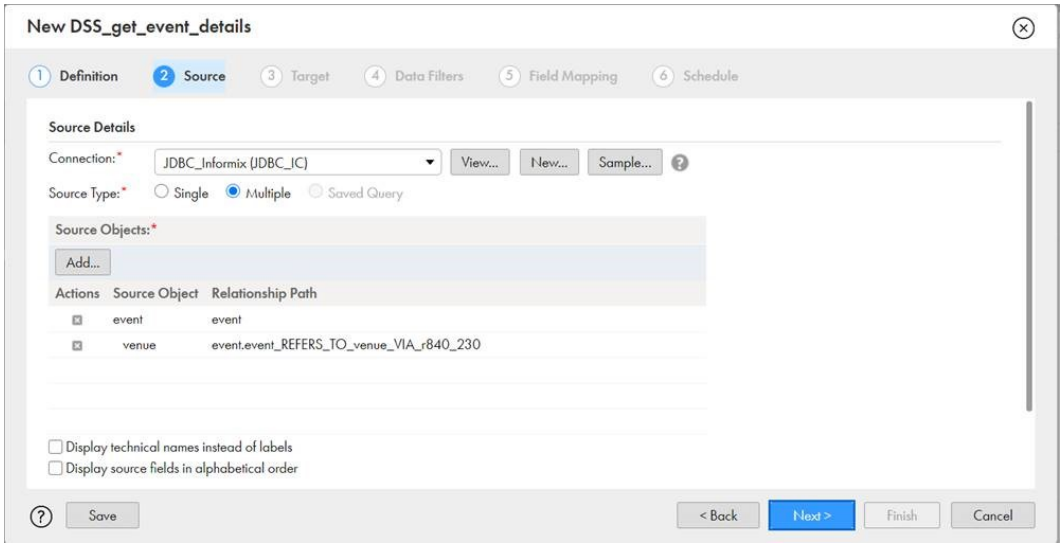
同期

イベントカタログを作成するために、Informix データベースおよび Sybase 間でイベントデータと venue データを同期する必要があります。Informix には、イベントオブジェクトと venue オブジェクトがあります。関連するこれらの Informix オブジェクトからデータを読み取ってから、Sybase にデータを書き込む必要があります。初期データロードについては、Sybase にデータを挿入するように同期タスクを設定します。増分更新については、Sybase に対してデータを更新/挿入するように同期タスクをスケジュールします。

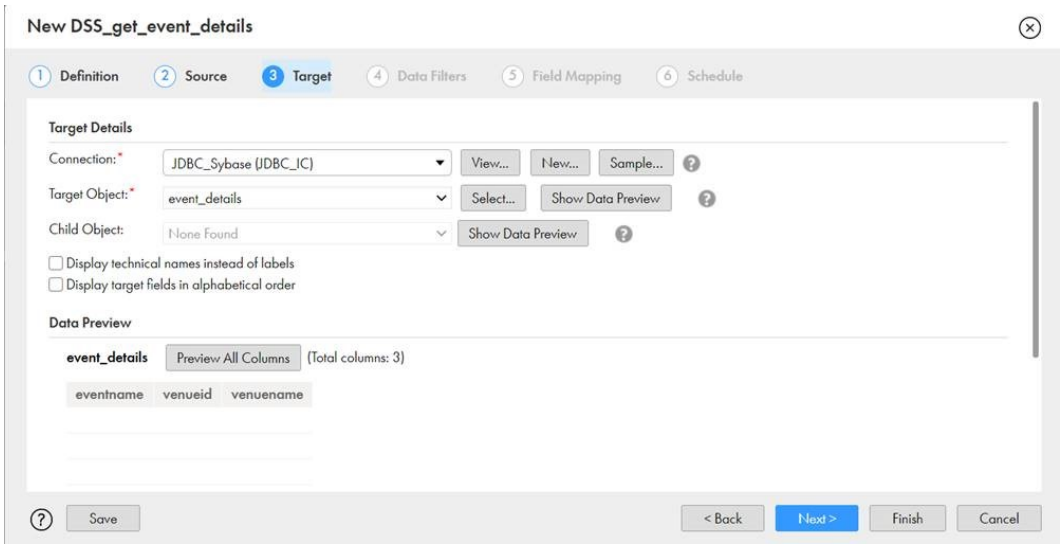
JDBC_IC 接続を作成して、Informix データベースと Sybase データベースに接続します。挿入操作に使用する同期タスクを設定します。

使用する Informix オブジェクトを選択すると、定義済みのリレーションが表示されます。

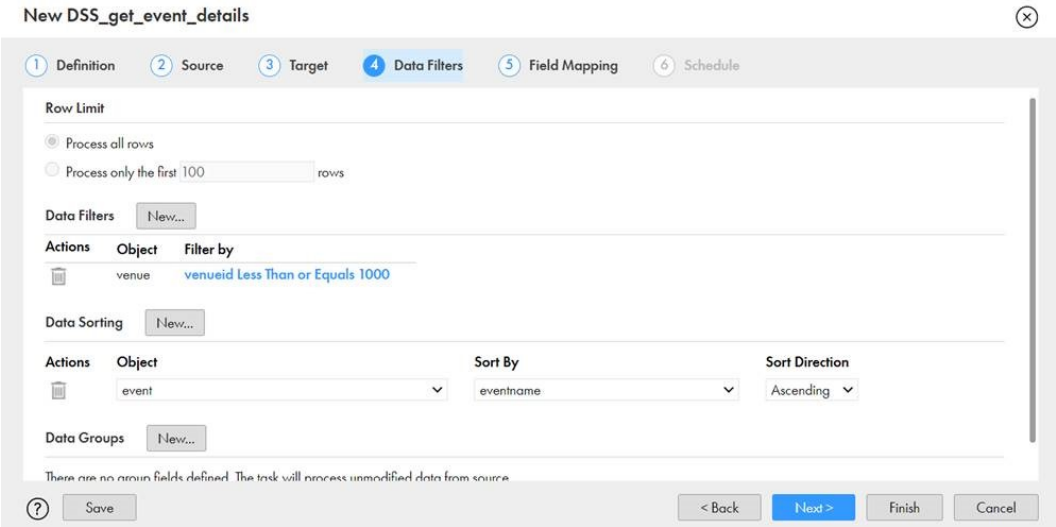
次の画像は、ソースオブジェクトとして追加されたイベントオブジェクトと venue オブジェクトを示しています。



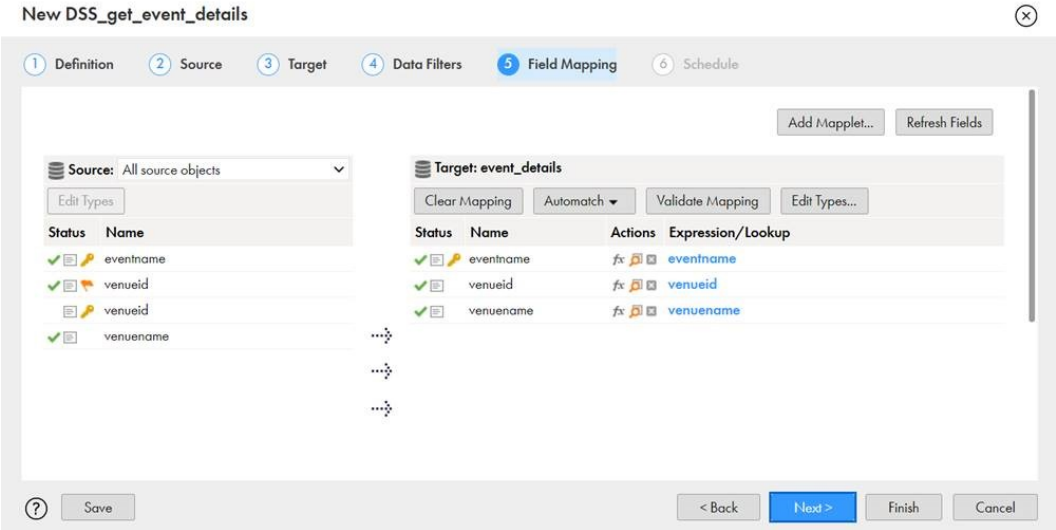
データをロードする必要がある Sybase ターゲットオブジェクトを選択します。



受信ソースレコードをフィルタする場合は、フィルタを使用します。



挿入するフィールドをマッピングします。



タスクを保存して実行すると、初期データがロードされます。

初期データを移行した後、データを増分的に同期できます。同じ Informix ソースと同じ Sybase ターゲットに対して更新/挿入操作を使用する同期タスクを作成します。最後の同期以降に変更されたデータを更新/挿入するには、$LastRunTime 変数または$LastRunDate 変数を使用する単純なデータフィルタを設定します。

タスクを保存し、タスクをスケジュールに基づいて実行するように設定すると、データが同期された状態になります。

第 4 章

JDBC を使用したマッピングとマッピングタスク

マッピングを作成するには、データ統合の Mapping Designer を使用します。マッピングを作成するときは、オブジェクトを表すソースまたはターゲットを設定します。

詳細モードでは、Mapping Designer で、高度な機能を有効にするためのトランスフォーメーションと関数を含むようにマッピングキャンバスが更新されます。

マッピングの JDBC ソース

JDBC ソースを使用するようにマッピングを設定するときは、ソースプロパティを設定します。

JDBC ソースの名前と説明を指定します。JDBC オブジェクトのソースプロパティと詳細ソースプロパティを設定します。

次の表に、JDBC ソースプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	ソース接続の名前。
ソースタイプ	ソースタイプ。次のいずれかのタイプを選択します。 - シングル。JDBC オブジェクトを 1 つのみ指定する場合に選択します。 - 複数。複数の JDBC オブジェクトを指定する場合に選択します。関連するオブジェクトは、単純なプライマリキーと外部キーのリレーションに基づいて表示されます。 - クエリ。ユーザー定義のクエリを指定して、ソースオブジェクトからデータを選択する場合に選択します。 - パラメータ。パラメータ名を指定する場合に選択します。このソーストランスフォーメーションを使用するマッピングに関連付けられたマッピングタスクでソースオブジェクトを設定します。
オブジェクト	マッピングのソースオブジェクト。
フィルタ	簡易フィルタまたは詳細フィルタを設定し、ソースの行を削除します。データフローの初期段階でフィルタリングを行うことによって効率を上げることができます。

次の表に、JDBC の詳細ソースプロパティを示します。

詳細ソースプロパティ	説明
ページサイズ	JDBC ソースからキャッシュされる行数。デフォルトは 1000 です。
分離レベル	トランザクションの並行処理レベルを決定して、データの不整合を回避します。以下の分離レベルから選択します。 - なし - TRANSACTION READ COMMITTED - TRANSACTION READ UNCOMMITTED - TRANSACTION REPEATABLE READ - TRANSACTION SERIALIZABLE デフォルトは［なし］です。
分離レベルのオーバーライド	データベースで分離レベルがサポートされていない場合、その分離レベルをオーバーライドします。このオプションをチェックすると、データベースのデフォルトの分離レベルでタスクが正常に実行されます。
改ページの有効化	該当なし。
Pre SQL	ソースからデータを読み取る前にソースデータベースに対して実行する Pre SQL コマンドです。
Post SQL	ソースからデータを読み取った後にソースデータベースに対して実行する Post SQL コマンドです。
トレースレベル	ログファイルに表示される詳細情報の量を設定します。［簡易］、［ノーマル］、［詳細 - 初期化］、［詳細 - データ］から選択できます。デフォルトは［ノーマル］です。

マッピングの JDBC ターゲット

JDBC ターゲットを使用するようにマッピングを設定するときは、ターゲットプロパティを設定します。

JDBC ターゲットの名前と説明を指定します。JDBC オブジェクトのターゲットプロパティと詳細ターゲットプロパティを設定します。

以下の表に、ターゲットトランスフォーメーションで設定できるターゲットプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続	ターゲット接続の名前。
ターゲットタイプ	ターゲットのタイプ。次のいずれかのターゲットタイプを選択します。 - シングル。JDBC オブジェクトを 1 つのみ指定する場合に選択します。 - パラメータ。パラメータ名を指定する場合に選択します。このソーストランスフォーメーションを使用するマッピングに関連付けられたマッピングタスクでソースオブジェクトを設定します。

プロパティ	説明
オブジェクト	ターゲットオブジェクトの名前。既存のオブジェクトを選択します。
操作	ターゲット操作。次のいずれかの操作を選択します。 - 挿入。 - 更新。 - 更新/挿入。 - 削除。 - データドリブン。データに基づいてアップデートストラテジを指定するには、式を設定します。式では DD_INSERT 定数を使用できます。

次の表に、JDBC の詳細ターゲットプロパティを示します。

詳細ターゲットプロパティ	説明
コミット間隔	コミット間の行間隔。デフォルトは 100 です。
再試行回数	整数値。接続が閉じたことによりクエリ実行が失敗した場合の再試行回数。デフォルトは 5 です。
再試行間隔	2 回の再試行の間隔（秒単位）。デフォルトは 3 秒です。
Pre SQL	データをターゲットを書き込む前にターゲットデータベースに対して実行する Pre SQL コマンドです。
Post SQL	データをターゲットを書き込んだ後にターゲットデータベースに対して実行する Post SQL コマンドです。
成功ファイルディレクトリ	成功ファイルのディレクトリ。各 Secure Agent マシンのランタイム環境で使用可能なディレクトリパスを指定します。デフォルトでは、データ統合は成功行ファイルをディレクトリ`<Secure Agent installation directory>/apps/Data_Integration_Server/data/success` に書き込みます。 Secure Agent のローカルディレクトリを入力します。管理者からこのディレクトリに対するアクセス権が与えられていることを確認します。

詳細ターゲットプロパティ	説明
エラーファイルのディレクトリ	エラー行ファイルのディレクトリ。各 Secure Agent マシンのランタイム環境で使用可能なディレクトリパスを指定します。デフォルトでは、データ統合はエラー行ファイルをディレクトリ`<Secure Agent installation directory>/apps/Data_Integration_Server/data/error` に書き込みます。 Secure Agent のローカルディレクトリを入力します。管理者からこのディレクトリに対するアクセス権が与えられていることを確認します。
拒否された行を転送	トランスフォーメーションが、拒否された行を次のトランスフォーメーションに渡すか、拒否された行を削除するかを決定します。デフォルトでは、マッピングタスクは拒否された行を次のトランスフォーメーションに転送します。

マッピングの JDBC ルックアップ

マッピングでは、JDBC オブジェクトを表すようにルックアップトランスフォーメーションを設定します。JDBC オブジェクトをルックアップとして使用する場合、特定の JDBC プロパティを設定する必要はありません。

データ転送タスクでルックアップトランスフォーメーションを設定することはできません。

付録 A

JDBC データ型のリファレンス

- JDBC のデータ型とトランスフォーメーションデータ型, 20 ページ

JDBC のデータ型とトランスフォーメーションデータ型

データ統合は、JDBC タイプ 4 ドライバを使用して、データを読み取ります。Secure Agent は、JDBC データ型をトランスフォーメーションデータ型に変換し、そのトランスフォーメーションデータ型を使用して、プラットフォーム間でデータを移動します。

データ統合が JDBC ターゲットにデータを書き込む場合、Secure Agent は、トランスフォーメーションデータ型を対応する JDBC データ型に変換します。

次の表は、データ統合でサポートされる JDBC データ型と、トランスフォーメーションデータ型を比較したものです。

JDBC データ型	トランスフォーメーションデータ型	範囲
BIGINT	Bigint	-9,223,372,036,854,775,808 to 9,223,372,036,854,775,807 精度 19、位取り 0
BINARY	Binary	1〜104,857,600 バイト
BIT	Integer	-2,147,483,648〜2,147,483,647 精度 10、位取り 0
BLOB	Binary	1〜104,857,600 バイト
BOOLEAN	Integer	-2,147,483,648〜2,147,483,647 精度 10、位取り 0
CHAR	String	1〜104,857,600 文字
CLOB	Text	1〜104,857,600 文字

JDBC データ型	トランスフォーメーションデータ型	範囲
DATE	Date/Time	西暦 0001 年 1 月 1 日～西暦 9999 年 12 月 31 日 （精度はナノ秒まで）
DECIMAL	Decimal	精度 1～28、位取り 0～28
DOUBLE	Double	精度 15
FLOAT	Double	精度 15
INTEGER	Integer	-2,147,483,648～2,147,483,647 精度 10、位取り 0
LONGVARBINARY	Binary	1～104,857,600 バイト
LONGVARCHAR	Text	1～104,857,600 文字
NUMERIC	Decimal	精度 1～28、位取り 0～28
REAL	Double	精度 15
SMALLINT	Integer	-2,147,483,648～2,147,483,647 精度 10、位取り 0
TIME	Date/Time	西暦 0001 年 1 月 1 日～西暦 9999 年 12 月 31 日 （精度はナノ秒まで）
TIMESTAMP	Date/Time	西暦 0001 年 1 月 1 日～西暦 9999 年 12 月 31 日 （精度はナノ秒まで）
TINYINT	Integer	-2,147,483,648～2,147,483,647 精度 10、位取り 0
VARBINARY	Binary	1～104,857,600 バイト
VARCHAR	String	1～104,857,600 文字

索引

C

Cloud Application Integration コミュニティ
　URL 4
Cloud 開発者コミュニティ
　URL 4

I

Informatica Intelligent Cloud Services
　Web サイト 4
Informatica グローバルカスタマサポート
　連絡先情報 5

J

jar ファイル 7
JDBC
　接続プロパティ 8
JDBC オブジェクト
　ルックアップ 19
JDBC コネクタ
　サポートされているアセット 6
JDBC タイプ 4 ドライバ 6
JDBC データ型 20
JDBC ドライバ jar ファイル 7

S

Secure Agent 7

W

Web サイト 4

あ

アップグレード通知 5

え

エラーファイル 7
エラーファイルのディレクトリ 12, 17

こ

コミット間隔
　デフォルト 12, 17

し

システムステータス 5
システム変数 13

す

ステータス
　Informatica Intelligent Cloud Services 5

そ

ソースのプロパティ 10, 16

た

ターゲットのプロパティ 12, 17

て

データフィルタ
　簡易および詳細 10
データベース 6
データ型 20

と

トランスフォーメーションデータ型 20

は

バッチ操作 11

ふ

フィールドマッピング 11
プライマリキーフィールド
　マッピング 11

へ

ページサイズ 10, 16

ま

マッピング
　ソースのプロパティ 16

マッピング *(続く)*
　ターゲットのプロパティ 17

め

メンテナンスの停止 5

る

ルックアップ
　JDBC マッピング 19